

主 題：このことばを聞いてください

聖書箇所：使徒の働き 2章22-24節

今から約二千年前、イエス・キリストが確かに死からよみがえられたことを祝う、最もすばらしい喜びの朝、私たちがいっしょに見たいみことばは、使徒2：22-24です。

まずは一度お読みしますので、神様のことばに目を留めてください。

#### 使徒2：22-24

「:22 イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のかしをされたのです。これは、あなたがた自身がご承知のことです。:23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。:24 しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」

#### ○目撃者による証言：イエス様に関する三つの事実

目撃者による証言、これは昔も今も大きな力を持っています。たとえば、あの少女アンネ・フランクもそんな目撃者のひとりでした。1929年、ドイツのフランクフルトで生まれた少女アンネは、ナチスドイツによるユダヤ人迫害から逃れるため、13歳の時に家族といっしょに秘密の隠れ家に潜伏するようになりました。その隠れ家はとても小さくて、物音を立てて見つからないようにしなければならなかったのです。彼女はいつも不安を覚えていました。しかし同時に、そんな小さな隠れ家の中で、彼女はただ怯えて隠れていただけではありません。そこで生活していた2年の間、隠れ家での出来事を、また自分が目の当たりにして抱いたさまざまな思いや気持ちを日記に記しました。軍の取り締まりへの恐怖や、戦争の残酷さ、またそれに加えて、いつか自由になることを夢見る楽しみや希望さえ、そこに綴っていたわけです。悲しいことにアンネは、生きてその声を直接人々に届けることはできませんでした。居場所が見つかって、警察に捕らえられてしまった彼女は、強制収容所の中で病気にかかって亡くなってしまったわけです。この時彼女はまだ15歳でした。しかしそんな彼女が残した日記は、後に広く出版されることになりました。そしてそれは見過ごしてはならないさまざまな事実、戦争の悲惨さや理不尽さというものを、世界中の人に気づかせることに繋がっていくわけです。実際の目撃者であるひとりの少女が、自分の目で見て、自分のことばで残した証言は、ただの文字ではなく歴史を変える声になったわけです。

そしてこの朝、私たちが見ていくみことばも同じです。これから見ていくのは、本人の作り話でも、うわさや架空の出来事でもありません。今回の箇所にも同じようにして、ひとりの目撃者の声が記されていました。かつて、この地上を実際に歩んでいたイエス・キリストと3年間の時間をともにして、この方がなされた一つ一つのことを目の当たりにしたペテロ本人が、自分の目で見たことを、そのまま真実として証言していました。目撃者、証人として、「このことばを聞いてください。」と、彼はイエス様に関する事実を人々に投げかけるわけです。ではいったい、彼はどのようなことを語ったのでしょうか。彼は実際にイエス様のどのような姿を目にしたのでしょうか。きょうは、そのことをいっしょに考えてみたいと思います。

特に、私たちがこれから見るペテロのことばからは、イエス様に関する三つの事実を読み取ることができます。イエス様に関する三つの事実です。そして、最初に知っててください。これから私たちが見ていく事実は、この当時、彼のことばを耳にした者たちの心を砕き、生き方を一新させ、そして彼らの

うちに最高の希望をもたらした圧倒的な力あるものでした。ですから、これから順番に見ていく中であって、ぜひ自分のこととして、三つの事実をよく考えてみてください。

## 1. イエス様は地上を歩まれたお方 22節

ではさっそく、最初の事実から見てみましょう。目撃者ペテロの証言から読み取れる一つ目の事実は、「イエス様は地上を歩まれたお方」だということです。イエス様は空想の話ではありません。実際に人々の間を生きておられた歴史上の人物でした。みことばを見てください。22節のところで、まずこのように述べていました。「:22 イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。」と。少しこの場面を思い浮かべてみてください。ペテロがこのことばを人々に語っていた時、イスラエルでは、五旬節やペンテコステと呼ばれる祭りが祝われている最中でした。ユダヤ人の三大祭りの一つでもあった、この祭りの期間は、いろいろな地域から何千、何万もの人たちが町に集っていたわけです。間違いなくペテロたちがこの時に泊まっていた場所の周りも、多くの人があふれかえっていました。そんな群衆に向かって、ペテロは声を張り上げて口にするわけです。「イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。」と。そして彼が最初にしたことは、人々に思い出させることでした。22節を読んでいて、皆さんは気づきましたか。こんなことばが繰り返されていました。「あなたがたの間で、……神はあなたがたに、……これは、あなたがた自身をご承知のことです。」と。「あなたがたに」、言い換えれば、ペテロが伝えなかった事実というのは、彼だけが知っていた秘密だったのではありません。だれも聞いたことのないような新しい情報だったのでもありません。このことばを聞いていた人たちが、もうすでに知っていた事実でした。これを聞いていた人たちも、これまで実際に目にし、耳にしていた出来事、イエス様について思い出させようとするわけです。私だけでなく皆さんも同じように、かつて目撃しましたよねと。皆さんももうご存じですよねと。では、具体的に何を思い出させようとしたのでしょうか。ここでは二つのことが挙げられていました。

一つ目に、人々は、イエス様がナザレ人イエスであったことを知っていました。人々の多くは、イエス様がガリラヤの小さな町、ナザレで育った人物であるということを知っていました。福音書を読んでもみれば、いろいろな箇所でもその様子を見て取ることができます。たとえば、マタイ21:10-11にこのように書いてあります。「:10 こうして、イエスがエルサレムに入られると、都中がこぞって騒ぎ立ち、「この方は、どういう方なのか」と言った。群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ」と言った。」と。群衆たちは知っていました。また、覚えていますか。イエス様が十字架につけられた時、総督ピラトは十字架の上に罪状書きを掲げました。その罪状書きには何と書いていたでしょう。そこにも「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」と書かれていたわけです。ですから、この当時のイスラエルの人たちは自分たちの目で見てよく知っていました。ナザレ人イエスという存在が、自分たちとともに歩んでいたのだということを知っていました。

二つ目に、人々は、イエス様が神様の力によって、力あるわざと不思議としるしを行われていたことも知っていました。イエス様が神様の力によって、さまざまな奇蹟というものを行なっていたことも人々はよくわかっていたわけです。イエス様の地上での歩みを振り返ってみれば、そこにはさまざまな力あるわざに満ちあふれていました。皆さんがパッと思いつくものは何がありますか。どんなことをイエス様はなされておりましたか。この方は水をぶどう酒に変えられ、病気で死にかけだった子どもや女性をいやし、足の萎えた者を立たせ、目の見えなかった者を見るようにし、一度に五千人以上の者にパンと魚を与えて養い、手に負えることのできない嵐を静め、悪霊に憑かれていた者から悪霊を追い出し、死んでいた者をよみがえらせることも一度でなく何度もありました。当時の人たちは、数え切れないほどの信じられないような出来事を目の当たりにしていたわけです。この当時の人たちにとって、イ

イエスが持っていたその偉大な力というものは、だれも否定することのできないものでした。だれもそれを否定できるような者はいませんでした。たとえばこの時代、民の間で最も尊敬されていた、最も著名な教師のひとりであったニコデモという人物も、イエス様に関してこのようなことばを残しています。ヨハネ3：2で、ニコデモはイエス様のところにやって来て、こう言うのです。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」と。人々から称賛を受けるような尊敬されるような教師も、こんなことばを残しました。また、この時王様だったヘロデという人物も同じです。王様ヘロデも、イエス様に会うことをとても楽しみにしていました。その理由がこのように記されていました。ルカ23：8に「ヘロデはイエスを見ると非常に喜んだ。ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたいと思っていたし、イエスの行う何かの奇蹟を見たいと考えていたからである。」と。当時の最高の教師も、王様も同じでした。またそれだけではありません。イエス様を憎んで激しく迫害した律法学者やパリサイ人たちも同じでした。イエス様の敵たちでさえ、目の前でなされているそのみわざというものを否定できませんでした。だから彼らは、その力は悪霊の力、サタンの力を使っているのだとイエス様を非難したわけです。要するに、かつてこの地上を歩まれていたイエス様が持っていた圧倒的な力は、すべての人に知られていました。イエス様のことをよく思う者たちだけでなく、よく思っていない敵たちの間でも、同じように認められていました。イエス様は神にしかできないことをなされ続けていました。この地上に完全な人、完全な神として来た御子イエス様の姿というのは、人々の目の前においてははっきりと示されていたわけです。

ペテロのことばに耳を傾けていた人たち、彼らもよくわかっていました。ですから、ペテロはそんな彼らに向かって言うわけです。イエス様がなされたこと、イエス様が教えられたこと、神の御子であるイエス様が、私たちの間で何をされたのか、実際に何をして歩まれたのか、あなた方ひとりひとりが、もうすでにご存じですと。しかし残念ながら、そこまで明らかに示されていたにもかかわらず、人々はこの方を信じようとも受け入れようともしませんでした。真理はあまりにも明白に示されていたのに、彼らはそれから目をそらして、この方を自ら拒み、そしてあることをするわけです。そのあることとは何か。それが、ペテロが次に証言してくれる二つ目の事実でした。

## 2. イエス様は十字架で死なれたお方 23節

二つ目の事実は、「イエス様は十字架で死なれたお方」でした。23節を見ていただくと、このように記されています。「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。」と。今お読みした日本語の訳だと、最初のことばは「あなたがたは」になっていましたが、原文ではこの箇所最初のことばは「この人を」でした。ペテロは、22節の話を受けて、23節の頭で強調して訴えるわけです。「皆さん、あなた方が十字架につけたのは、ほかのだれでもありません。この人です。」と。「私たちの間であわれみを示されて、神にしかできないようなすばらしいことを成し遂げて、そんな偉大なみわざを数多くなしたこの人を、あなた方が十字架につけて殺したのです。」と。ご存じのとおり、十字架にかかられたイエス様は、無実なお方でした。地上を実際に歩いておられたこのお方は、その生涯において、ただの一度として過ちも罪も犯すことはありませんでした。人々が「十字架につけろ！十字架につけろ！」と叫ぶその中、連れて来られた裁判の席にあっても、それは明らかに示されていました。この時、イエス様の取り調べを行なったローマの総督ピラトも、一度だけではなく、三度にわたってこのようなことばを残しています。よく聞いてください。ルカ23章に一連の流れが書いてあります。23：4でこう言われます。「ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には何の罪も見つからない」と言った。」と。少し話し合いがあり、その後14節でもこう言われます。「こう言った。「あなた方は、この人を、民衆を惑わす者として、私のところに連れて来たけれども、私があなたがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような罪は別に何も見つかりませ

ん。」と。そしてもう少し会話がなされた後、またピラトは22節で言います。「しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。「あの人がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」」と。地上を歩まれていた神の御子イエス様は、罪のいっさいないお方でした。イエス様の弟子たちがそのことを証言しているだけではありません。イエス様の敵でさえ、そのことをはっきりと述べていました。

しかし、これを聞くとある人は思うかもしれません。不思議に感じるかもしれません。この方が無実なお方で、さっき見たように圧倒的な力を持っておられるお方であれば、このような疑問を抱くかもしれません。イエス様には自分が十字架にかかることを止めることはできなかったのかと。嵐を静めることができ、死人さえよみがえらせることのできるすごい力を持っておられるお方なのだとしたら、人々が何を企み、何を計画しても、十字架の死を自分自身で防ぐことはできなかったのかと。どう思いますか。そのとおりです。イエス様にはそれを防ぐことはもちろん可能でした。覚えていますか。イスカリオテのユダの裏切りを、イエス様はいつから知っていましたか。最初からご存じでした。しかし、それでもなおイエス様は彼に、このようなことばをかけるわけです。ヨハネ13：27でこう言われます。

「彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼（ユダのことです）に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」」と。気づいていてなお、それを止めることをしませんでした。イスカリオテのユダだけではありません。ゲッセマネの園で兵士たちが自分を捕まえにやって来た時でも同じでした。最も緊迫していた場面においても、イエス様はこのようにことばを言われました。マタイ26：52-53で「:52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。:53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。」と。イエス様には、それもできました。しかしそれをしませんでした。裁判の真ただ中であっても同じでした。「釈放する権威や十字架につける権威が自分にはあるのだ」と述べるピラトに対して、イエス様は次のように答えられるわけです。ヨハネ19：11で「イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません…」と。

ですから間違いなく、イエス様には十字架の死を止めることができました。微塵たりともそこには難しさなどありませんでした。この方には、自分に手をかけようとする者たちのことを滅ぼしてしまうことさえ容易にできたわけです。その力も、その権威も、この方には十分に備わっていました。しかしこの方は十字架にかかったわけです。どうしてでしょう。その一つの答えをペテロはこの箇所ですべて口にしていました。もう一度、23節を見てください。特に、途中でこのように書かれていました。「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、」と。ここで「予知」と訳されていたことばですが、これには“前もって決める”とか“あらかじめ定める”といった意味が含まれています。つまり何が言われているかということ、十字架での死というのは、神様ご自身が前もって、あらかじめ定めていたご計画だったということです。イエス様は、無力で、十字架から降りることができなかったお方ではありません。イエス様は力強く、父なる神様のご計画に従って、十字架に留まることを自ら選ばれたお方でした。これを限られた私たちの頭で完全に理解することなど到底できないですが、少し立ち止まって考えてみてください。確かに、「十字架につけろ！」と叫び続けた群衆にも、殺害の計画を実際に立てた律法学者やパリサイ人にも、また、十字架に直接張りつけにしたローマの兵士たちにも、イエス様の死の責任というものは当然ありました。しかし、その一つ一つの出来事は、すべて三位一体の神様が、最初から持っておられた計画だったということです。その一つ一つは偶然に起こったものではありません。後から思いついて、急遽変更したものでもありません。私たちが、十字架を見上げるその時、私たちはそこに神様のなされたすばらしいみわざを見ます。その十字架は、神様が最初から持っておられたご計画を成し遂げたすばらしい現れだったのだと、私たちはそこに神様の知恵を見ることがで

きます。この地上を歩んでいたイエス様は、その計画に従って捕らえられました。その計画に従って十字架にかかり、死なれました。強制されてでも、いやいやながらでもありません。イエス様は、その計画に自ら進んで従い、喜んで自分のいのちをささげました。イエス様ご自身がこう言われるわけです。ヨハネ10：18では「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」と。こうして、一度も罪を犯したことの無い正しいお方が、本来であれば、最も卑劣な犯罪者がかかる十字架の上にはりつけにされました。圧倒的な力や知恵を持っておられた神の御子が、ご自分のいのちを捨てられたわけです。そしてそのすべてが、神様が定められていたご計画でした。そして皆さん、これこそが私たち罪人のために、神様が、イエス様が示してくださった本当の愛でした。

目撃者であったペテロは、別の箇所でもこのようなことばを口にしています。Ⅰペテロ3：18をよく見てください。「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。」と。またもう一つ、別の箇所でもはっきりとこのように述べています。Ⅱコリント5：21で「神は、罪を知らない方（イエス様のことです）を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」と。皆さん、私たちは忘れてはいけません。正しいイエス様は、悪い私たちの身代わりとなってくださったお方だということです。いっさい罪のないお方が十字架にかかったのは、ご自分の罪のためではありません。十字架に値したのは、本来罪人である私たち自身でした。この世界のすべてと私たちさえも造られた創造主である神様を、生まれながらに認めようとせず、罪に罪を重ねて逆らい続けてきた私たちこそが、あの十字架での苦しみに、あの十字架でのさばきに、あの十字架での死にふさわしい者でした。しかし、そんな罪深い私たちの犯した罪のすべてを負って、罪を知らないお方が、代わりに死んでくださったわけです。いっさい罪や過ちを犯さなかった完全なお方が、私たちの代わりに十字架で罪となされました。どんな時も忠実に歩いて、偉大な力を持っておられたお方が、私たちの代わりに罪の罰やさばきを受けられました。いつも父なる神様の喜ばれることだけをなした御子が、私たちの代わりに罪を憎み、罪に燃え上がる神の怒りを味わわれました。私たちの代わりに、激しい痛みを悶えながら死んでいったわけです。本来ならイエス様は、あの場所にいる必要はありませんでした。罪の罰も御怒りも苦しみも、その一つ一つは、すべて罪人である私たちに値するものでした。それにもかかわらず、そこから降りることができたにもかかわらず、罪のないお方が私たちの身代わりに、そこで死んでくださったわけです。

そのことを預言者イザヤもはっきりと述べていました。イザヤ53：4-6で「4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」と。ご自身は何もしていないのに、まるでご自分が罪を犯したかのように、イエス様はあの十字架の上で、私たちのすべての罪をその身に背負われました。すべての罪というのは、私たちがこれまでに犯してきた過去の罪だけではありません。今私たちが日々犯すような罪も、これから先に犯す罪も、文字どおりすべてをこの方は背負ってくださいました。そして、すべての罪を背負われた御子が身代わりとなって十字架で砕かれたからこそ、この方を信じ受け入れる者は、必ずやって来るさばきの日に、砕かれることはなくなったわけです。ただ愛にあふれた救い主にあって、何よりも汚れていた私たちは、ただ恵みのうちに罪の赦しを、救いを与えられるという最高の希望に、喜びにあずかることができるようになったわけです。それが、私たちには理解できません。しかし、これが神様の定めておられたご計画で

した。十字架は、私やあなたのような罪人のために、ご自分のいのちをささげて、赦しといのちを与えようとしてくださった主の深い、深い愛の現れだったわけです。しかし、これで終わりではありませんでした。目撃者ペテロは、まだことばを続けていました。

### 3. イエス様は死からよみがえられたお方 24節

もう一度、使徒に戻っていただいて、ペテロが教える三つ目の事実は、「イエス様は死からよみがえられたお方」でした。みことばを見てください。24節はこう続いています。「しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」と。

皆さんも、これまでにだれかが亡くなる瞬間に立ち合われたことがあるかと思います。私自身、今でも鮮明に覚えています。自分の祖父が亡くなった時、それまでそこで動き続けていたモニターの波形が、すべて止まってしまいました。ほんの数分前まで、ほんの数秒前までは生きていたのに、次の瞬間には息が止まっていました。そして、一度死がその人を支配すれば、その後は、どんなに手を握ったり、声をかけたりしたとしても何の反応もありませんでした。死の力というものは、現実のものとして存在しているわけです。この圧倒的な力というものに打ち勝てるような人はいません。ここにいる私たちもみな、いつか死を迎えます。死というものは人にはどうすることもできない問題でした。しかし、イエス様は違っていたわけです。この方は、十字架にかかって死なれ、そして墓に葬られて終わりではありませんでした。この方は、神様の計画と約束のとおり、十字架で死なれて、そして三日目に死からよみがえられました。いのちであり、神の御子であるお方を、死が墓に閉じ込め続けておくことなど、できなかつたわけです。そして今でも、イエス様のからだに納められていた墓は、空っぽのままです。だれにもできなかつたことを、イエス様が成し遂げました。一度止まったものが再び動きました。この方は、死の力など、全く物ともせず、それを完全に打ち破ることのできた勝利者だったわけです。

そして、考えてみてください。もしイエス様が復活していなかったとすれば、この方を憎んで迫害し、十字架につけた者たちは、嘲笑っていたでしょう。イエス様は、地上での生活において、ご自分が神の御子であるということ、死んだ後にはよみがえるのだということ、何度も何度も話し続けていました。だから、もし復活していなかったら、彼らは「ほら見たことか」と、「イエス様も、イエス様のことばも、ただの偽りにしか過ぎません」と言い合っていたでしょう。しかし、この方は、実際によみがえりました。語られたことばも約束も、すべて真実のものであるということ、証明されました。人のだれにも打ち破ることのできない死の力を打ち破ったお方が、ご自身が神の御子であるということ、確かに公に証明したわけです。この点に関して、みことばもこのように述べています。ローマ1:3-4で「:3 …御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、:4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」と。人々は間違っていました。目の前で奇蹟を何度も目にして、その教えを何度も耳にしてなお、イエス様を拒んで、「十字架につけろ！」とそう叫んだ人たちは、間違っていました。この方こそ罪のない神の御子、今も生きておられる勝利者、そして、やがて再びやって来られる王の王なのです。こうしてペテロは、目撃者として、その証言を大胆に語りました。イエス様が実際に地上を歩み、イエス様が実際に十字架で死なれ、そして何よりもイエス様が実際に死からよみがえられたのだということ、事実として語りました。

#### ◎イエスの復活が教えてくれるもの

そして皆さん、この復活の事実を覚える時に、今を生きる私たち自身も考えなくてはならない重要な真理があります。ほかにも挙げられますが、少なくとも二つのことを私たちに教えてくれます。

#### ①いつの日かさばきの日はやって来ること

イエス様の復活が、私たちに何を教えてくれるかと言うと、一つは、いつの日か必ず、さばきの日はやって来ることです。覚えていてください。イエス様が死からよみがえられた以上、このイエス

様を知らずに死んでいった者たちは、死後、正しい義なる裁判者の前で、正しく裁かれる日はやって来ます。どういうことか、みことばがこんな約束をするわけです。使徒 17 : 30 - 31 をよく見てください。こう言われています。「:30 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。」と。言われていたことは明白でした。神様はすべての人に悔い改めを求めていました。どうしてかと言うと、それは、この世界をさばく日が、もうすでに計画されているのだと。その日がもう定められているのだと。そしてその日、この世界を創造された正しい神様は、どのような汚れも過ちも見過ごすことはありません。そして、ひとりひとりが犯したすべての罪にふさわしい報いを、罰を、必ず与えられるお方です。

ですから、もし、まだこの中に罪を認めず、かたくなに神様を拒んで、自分の思いのままに生きている人があるのであれば、どうかよく考えてください。ある人は言うかもしれません。「それは、あなたの意見でしょ」と。「本当にさばきがあるかどうか、わからないでしょう」と。「自分の好き勝手に生きていたとしても、別に何か自分に影響があるわけでもなく、大した問題ではないでしょう」と。いいえ、そうではありません。先ほどのみことばの続き、使徒 17 : 31 にこのように書いていました。

「……日を決めておられるからです。そして、その方（イエス様のことです）を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」と。

神様のさばきが、なぜ必ずあると言えるのでしょうか。それは神様が、イエス・キリストを死者の中からよみがえらせたからでした。それによって、確証を与えているわけです。イエス様の復活がなければ、さばきがあるかはわかりません。しかし、イエス様の復活があるからこそ、私たちは間違いなく言うことができます。将来、必ずそこには主を知らないで死んだ者が立つ、さばきの日があるのだということです。キリストの復活は、さばきがあることの揺るがない証明でした。ですから、もし、まだこの救い主を知らないのであれば、時間が残されているきょうという日に、自分の罪を認めて、悔い改めて、イエス様を自分の救い主として信じて受け入れてください。自分のことを愛して、自分の罪を愛して、自分に拠り頼んで生きていくのではなく、私やあなたの身代わりとなって十字架にかかって死んでくださり、よみがえられたお方を、ただ求めてください。みことばは、このように約束しています。ローマ 10 : 9 で「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」と。イエス様のうちには救いがあります。ですから、どうか、ご自分のいのちを捨ててくださったお方を信じて、この方を愛して、この方のために感謝しながら、すべてをささげる者として、救い主を主とあがめる者として、きょうから歩んでください。さばきの日は必ず来ます。それが一つ目です。

## ②いつの日か必ずイエス様とともに過ごす日がやって来ること

もう一つ、イエス様の復活が私たちに教えてくれることは、いつの日か必ず、イエス様や兄弟姉妹とともに過ごす喜びの日がやって来ることです。私たちはもうよく知っています。すべての人に死はいつかやって来ます。この世での人生を終えるその日は、もう今なお一刻一刻と近づいています。しかし、イエス様の死と復活を信じる信仰者には、死は最後ではありません。息絶える瞬間は、悲しみではありません。その瞬間は私たちにとって、最も喜びの瞬間です。なぜでしょう。それは、その瞬間、私たちは愛するイエス様のもとに行き、このお方と永遠とともに過ごすようになるからです。そこで同じようにイエス様を信じ、イエス様を愛して生きてきた兄弟姉妹と再会することになるからです。

ローマ 6 : 23 に「罪から来る報酬は死です。しかし、神のくださる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」と書いてあります。今でも覚えています。祖父が亡くなった病室で、いっしょにいた私の父がかけたことばを忘れられません。「また天でね。」と言っていました。イエス様が死の力に勝利したということを知る者たちにとって、死というものは永遠の敗北ではありません。死と

いうものは、一時的な別れにしか過ぎません。その希望を私たちは持っています。感謝だと思いませんか。勝利された復活の主とともに歩むことのできる私たちは、どんな時も喜ぶ理由を持っています。死ぬことさえ喜ぶことができます。周りを見渡してみてください。イエス様を知らない者たちは死を恐れます。私たちは死など恐れません。どこに行くのかを知っているからです。だれのもとに行くのかを知っているからです。そうだとしたら、希望がないような者のように歩むのではなく、希望を持っている者として、その希望を与えてくださった方をあかしして生きていくことです。地上で残された一日一日を忠実に歩み続けることです。Iコリント15章にも、このような約束が書かれていました。Iコリント15：55-58で「:55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。:57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」と。

かつて、目撃者ペテロの語った証言は、大きな力を持っていました。その時の一瞬だけの話ではありません。すべての人の永遠にかかわるような力と影響を持っていました。どうでしょう。あなたはきょう、この事実にとどのように応答するでしょう。「このことばを聞いてください。」と訴えたペテロのことばを人々は耳にしました。そしてこの人々は、このような応答をします。使徒2：37に「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたら良いでしょうか」と言った。」と書かれています。彼らは、自分たちがしたこと気づきました。もうすでに明らかにされていた事実を、自分のこととして認めました。自分の罪を認め、悔い改めてイエス様を信じ受け入れました。

果たして、私たちは変わらずに拒み続けるのでしょうか。目撃者の証言がはっきりと教えてくれるのに、それでもなお、自分のやりたいことをし続けていくのでしょうか。それとも、心を刺されて、自分の罪が、イエスを十字架につけたのだと、そう信じて受け入れて、この方のために生きていこうとするのでしょうか。私たちの愛するイエス様は、実際に地上を歩まれました。実際に十字架にかかり、実際によみがえりました。そんな生きていらっしゃるお方に、心から感謝する者として、ともに歩んでいきましょう。